

詩文集

手紙

小林陽子



日本図書刊行会

手 紙

1986年6月20日 第1刷

著 者 小林陽子（こばやしおうこ）

発行者 福沢美千子

発行所 日本図書刊行会

〒151 東京都文京区音羽1-15-12東急ドエル・アルス音羽313

(03)945-6361 郵便振替東京1-92065

定 価 1,500円

印刷所 三幸印刷株式会社

製本所 小泉製本所

©1986 Printed in Japan

詩文集

手 紙

小林陽子

日本図書刊行会



手

紙

目次

第一章

ろう細工	我子	10
夜更け		
耐え忍ぶ		
少年よ(道)	11	9
よし子ちゃんの風船	12	
古里	13	
一本の木	15	
乳母車	16	
衣替え	17	
初恋	18	
ふらみんごのうた	18	20
白菊の想い出(少女時代)		
あきらめの花びら咲く物語		
22	21	

第二章

うさぎ	家	一枚のゑ
手紙	イラスト	24
乗せる		
刺す		
根無草		
葉無草		
枝無草		
生氣		
イラスト		
拭いている涙		
玉梓(薬草)		
人形		
41	36	37
35	34	33
32	31	
30	29	
25	24	23
40	39	

生まれ変わる 42
速達 43

行きすぎた春(マーガレットを持つ女)

ロダンの彫刻
僕の鍵盤 72

眼鏡

73

乙女の像

75

77

71

妹 46
藍 47

小詩集(あだむといぶ)

49

一欠片

76

78

74

76

78

80

82

84

86

88

第三章

月の寄祭は
59

観客 60

日曜日 62

64

66

68

70

72

74

76

78

80

82

84

86

88

90

92

94

96

98

100

102

104

106

108

110

112

114

116

118

120

122

124

126

128

130

132

134

136

138

140

142

144

146

148

150

152

154

156

158

160

162

164

166

168

170

172

174

176

178

180

182

184

186

188

190

192

194

196

198

200

202

204

206

208

210

212

214

216

218

220

222

224

226

228

230

232

234

236

238

240

242

244

246

248

250

252

254

256

258

260

262

264

266

268

270

272

274

276

278

280

282

284

286

288

290

292

294

296

298

300

302

304

306

308

310

312

314

316

318

320

322

324

326

328

330

332

334

336

338

340

342

344

346

348

350

352

354

356

358

360

362

364

366

368

370

372

374

376

378

380

382

384

386

388

390

392

394

396

398

400

402

404

406

408

410

412

414

416

418

420

422

424

426

428

430

432

434

436

438

440

442

444

446

448

450

452

454

456

458

460

462

464

466

468

470

472

474

476

478

480

482

484

486

488

490

492

494

496

498

500

502

504

506

508

510

512

514

516

518

520

522

524

526

528

530

532

534

536

538

540

542

544

546

548

550

552

554

556

558

560

562

564

566

568

570

572

574

576

578

580

582

584

586

588

590

592

594

596

598

600

602

604

606

608

610

612

614

616

618

620

622

624

626

628

630

632

634

636

638

640

642

644

646

648

650

652

654

656

658

660

662

664

666

668

670

672

674

676

678

680

682

684

686

688

690

692

694

第
一
章



ろう細工

今日のあなたの心の中には
ほどけない結び目が一杯あって
ウインドウの中の

夏の想い出が

ほんの少しでも片付けられたなら

冷やかな気配の中に

のめり込んでいいのだけれど

だらしなく水着を脱ぎっぱなしの

わたしは

まだ秋をむかえるわけにはいかないと

熱い紅茶をほんの少しだけ口にふくんで

器をもどすと

「でももう秋だから……」

といって

あなたはさも満足そうに流し込む

いつもなら

たわいのないわたしの言葉を

手 紙 て い ね い に つ く ろ つ て く れ る は ず な の に

ろう細工のような虚しさが
こぼれはじめる

危い橋をわたりながら

着ているものを一枚一枚脱ぎ捨てて

とうとう裸のまま

ここまできてしまつたわたしなのに

それでもあなたは

「裸はいやよ」

といって

はずしていた貝ガラボタンさえ

閉じてしまつて

もう秋風の中を歩いている

いつもなら

たわいのないわたしの言葉を

たわいのないわたしの言葉を

我 子

二つとならない小さな命が
夢も何もなかつた私に
生きる勇気をあたえてくれた
そんなこととは少しも知らず
毎日無邪気なこと
わけが分かるようになつて
父のことを見いたら
二人で優しいお父さんさがそうね
といおう
成長して
やはり父のことを聞いたら
私のあやまちを
すべて話そ
我子のいることが
この世の大きな未練となつた今

はつきりと知る

人は愛によつて生きるのだ
どんなささいな愛でも愛があれば
人は生きる努力をするのだと

私は今

我子によつて生かされている

この世に誕生して

二回目の冬を迎えるとしている我子

知つてほしい

もつときびしい冬があることを

夜更け

夜更けの海は静かで暗い
波打つ私の心

あと何年かかるだろう
臆病な私が

子供のように

時々ダダをこねたくなる私が
子供をつれて海へ行く

何と可笑しな親子だろう

海のような広い心になりたいと
海のように逞しく育ってくれと
ひたすら願いながら

夜更けはときおり

白い堤防に立つ

離婚して二年間

育児に専念し

何とか自活する道をと

洋裁を習い始めて八ヶ月

洋裁の腕は上がったけれど

私の心はいら立つばかり

あの島の灯りを

しげしげと見つめることができるのは
たとえ何年かかっても

私は歩きつづける

自分に打ち克つために

耐え忍ぶ

美しく悲しく

くすんだ枯木は
我身とともに耐え忍ぶ

美しく哀しく

くすんだ枯木は我身と共に

耐え忍ぶ

さすらい色の空は厳しく見守り
やがて来る春に
祈りをこめる

たとえ落悟の身であつたとしても
我子への愛を保ちつづける中に
やがて開ける道を信じて

雲の流れは時を刻む祈り
すべてに幸あれ
すべてに幸あれ

歩きつづければよいのだ

それがあなたに与えられた一つの道であるの
だと信じて

少年よ

私はあなたに仮面など渡しはしない
たとえそれが笑いの面であつたとしても
やがて逞しく成長したあなたの笑いが偽物で
あつてはならぬからだ

理由のないハッタリや誤魔化しの人生を歩ん
でほしくないからだ

人は真実に笑い 嘆き 苦しみ生きていかな
ければならない

少年よ

いつかあなたが愛する人の太陽になりえたと
き

あなたはあなた自身の幸福を願つてはならな
い

愛する人の幸福をどこまでも願つてしまつすぐ

私の道なのだから

手

紙

少年よ(道)

少年よ

優しいあなたよ

あなたはあなた自身の道をはずしてはならな
い

道をはずれるために神仏を拝め

幾年月かかろうと必らず良い結果をもたらし
てくれるのが神仏であるからだ

少年よ

かけがえのないあなたよ

私があなたに出来ることはただ一つ
あなたの幸福を願つてまつすぐ歩きつづける

ことだけなのだ

それが母である

私の道なのだから

よし子ちゃんの風船

一杯つまつていて
いまにもあふれそだつた

私と同じ年に生まれたよし子ちゃんは
生まれてまもなく
一生のうちで流す涙を
一晩でつかつてしまつたのだ
けれどその逝つてしまつた顔は
白い京人形のよう
やすらかな微笑をかくしきれないでいたとい
う

私の幼い日のことだつた
おばさんのそんな心の中を見たときから
私は母からもらつた大切な風船が
手からはなれてしまつても少しも悲しくはなかつた
天国でよし子ちゃんがきっと受けとめてくれると思つたからだ

よし子ちゃんの着ていたチヨックキは
赤い花がらの座蒲団になつて
よし子ちゃんの家で明るく咲いていた
おばさんは決して涙を流さない人だつたが
よし子ちゃんのことを話すとき
心の中にはよし子ちゃんのおいていつた涙が

古里

馴染んだ古里を出る時には私が私であるべき明るさやときめきを確かに持つて出たつもりなのだがやがて気付いて見ると古里のどこかに置忘れてきたに違いないと思うのだ

それでこの間古里をたずねた折に昔歩いた懐しい道を歩いて見たのだがさながら見つからないのは山間の小さな村の地を占領するよう横たわっている大川の流れの底にひつそりと身を埋めているためなのだろうか

その川の上にもあるべきものがないのだあんなに頑丈な橋だったのに両岸に置き去りにされた古びた欄杆がそそり泣きながら空虚な思いで天を見上げていたのだ村では新しい橋が建設される

かろうとした私の年がまだ早すぎたのだろうか

それにも私は搜さなければならぬ私が私であるべき明るさやときめきに代わる何かを

でなければ私は古里さえも失くしてしまう